聖白天使
イノセントエンジェル
ピュアハート
白濁に穢される発情コスチューム
小説 火村龍
挿絵 宮代龍太郎
立ち読み版

序章　二人の聖白天使（イノセントエンジェル）　006
一章　淫欲に染まる聖衣　025
二章　敗北の白濁コスチューム　070
三章　ロストヴァージン、恥辱の発情天使　099
四章　裏切りと汚辱の街　156
五章　崩壊の発情コスチューム　203
終章　淫獄の聖白天使（イノセントエンジェル）　250

## 登場人物紹介

Characters

### 美咲（みさき） 真由（まゆ）

「ピュアハートマユ」に変身して、ケガレによって怪人となってしまった人たちを浄化する少女。両親を悪魔に殺されており、同じような人が出ないように戦っている。

### 水名（みずな） 愛来（あいら）

真由の幼なじみで、「ピュアハートアイラ」に変身する。悪魔と戦う理由は、真由が心配で一緒に戦うためであるが、そこには秘めた想いが……？

マユのグローブに染み込んでいた浄化されかけのケガレなど比べものにならないほどの淫悦がアイラを襲っていた。

数本の触手がこれ見よがしに亀頭を揺らしながら、胸と股間のあたりでゆらゆらと揺れる。短すぎるスカートはすでに股間を隠す役目を果たしておらず、汗蒸れの密着コスチュームは半分透けてしまっていた。両胸と恥ずかしいところには、ピンクのハート呪符だけでなくいけない突起まで浮かび上がっており、淫魔がそれらを狙っていることは明白だった。

「はひっ、う、ぁ……！　む、無駄よ……!!　たとえ浄化の光が出せなくても……はぁ、はぁ……この呪符がある限り、わたしを、い、虐めることなんてできないんだから!!」

虐めるという言葉に、頬と胸がかぁっと熱くなる。触手を前にしたその響きはとても淫靡で、マゾヒスティックな快感が湧き上がり背筋がゾクゾクした。

（こ、こんな、触手なんて気持ち悪いだけなのに……！　イヤらしい気持ちが膨らんで……。ダメ、爆発してしまいそうだわ）

コスチュームに透けたピンクの呪符が、アイラにとって最後の砦だった。理性が吹き飛ばされそうな快感が絶えず熟れた身体を襲う。それを、ギリギリのところで桃色ニプレスが踏みとどまらせる。触れた淫魔を消し飛ばす聖気が込められた呪符がある限り、聖白天使（イノセントエンジェル）の身体が快楽に本当の意味で堕ちてしまうことはない。しかし、聖白天使（イノセントエンジェル）と闘いを続けてきた淫魔は、この呪符の欠点を知り尽くしていた。

ぐじゅっ、じゅぱ、じゅるるるぅっっ‼

「あきゃあぁぁんっっ‼　や、やめなさい！　コスチュームの上から擦らないでぇ！」

勃起乳首とクリトリスを、触手たちが透けた天使の衣の上から刺激してきた。直接触れなければ、呪符は破邪の力を発揮することはない。アイラをめくるめく快感が揺らした。

「ひぃぃんっ！　ち、乳首、こりこり……あぁんっ！　つらすぎるわよぉっ‼」

歯を食いしばり目を見開き、アイラは首を振って悲鳴をあげた。エクスタシーの波が幾度となく押し寄せ、天使を昇りつめさせ淫獄へ引きずり込もうとする。

マユのグローブをつけオナニーし、背徳感とケガレに悶え昂奮していたせいで、闇のエナジーの侵蝕が早い。見開いていた瞳が蕩け、口の端からは涎が垂れている。

（こんなっ……ほ、欲しくなってしまうわ！　あぁっ、マ、マユ！　わたしを助けてっ！　コスチュームどろどろで、おかしくなりそうよ）

悪魔に囚われているというのに、アイラの心が正義と快楽の間で揺れる。その心の隙間に、淫魔はするりと入り込んだ。

「つらいか？　ピュアハート。堕ちれば楽になれるぞ」

傲慢で威厳に満ち、聞く者を恐怖に震わせていた大悪魔の声は、いまは女を堕とす甘い囁きに変わっていた。淫獄の主の、乙女の欲望を撫で回し、誰もが持っている本能を呼び起こす低く心地よい声は、発情する天使の心を貫いた。

「う、ぁ……お、堕ちないわ……わらし、堕ちたりしないんだから……」

だが、そんな淫魔の誘惑を、アイラは硬い理性ではね除ける。しかし、どれだけ心を強く持とうとも、ケガレは確実にアイラの身体を蝕んでいた。

じゅるりと涎が流れる。瞳がブルブルと震え、白目を剥いてしまいそうだった。ケガレがダラリとコスチュームに垂れる。

「はうぁっ！」

女体がビクンッと跳ね、愛液が飛び散る。純情な乙女心の中に入り込んだ淫魔王は、アイラが人知れず抱えていた闇を巧みに煽動した。

「もう一人の天使を、好き放題にできるぞ」

「え……？」

ドキリと心臓が跳ね上がる。たたみかけるように悪魔の言葉が続いた。

「お前が愛している、大切なパートナーだ。何度も名前を呼び、自慰に耽っていただろう」

聞いてはならない。こいつは敵だ――正義の心が訴えている。しかし、心地よい快楽の旋律の前では、そんな声は雑音にしかならない。いけないと思いながらアイラは応える。

「マ、マユ……？」

「そう、マユだ……。そいつを好きにできる。コスチュームを汚し、発情させ、貴様の愛液をぬり絶頂させる……マユは、お前の虜になる……」

アイラの中でアスモデウスの言葉が回っていた。マユへの愛情、彼女を守りたい、そのために天使の力を受け入れた。マユが好き、大好き――。ずっとそばにいたい。マユを見

ていたい。マユに見られていたい。マユのグローブをはめた右腕が熱い。
悪魔の甘言に、どろりどろりと、アイラが抑え付けていた欲望が溢れ出してくる。
（マユはみんなを守ろうとしてる……わたしだけを見てはくれない……。マユがわたしの虜……わたしだけを見てくれる……）
ぐわんぐわんと、音と視界が揺れた。
（ダメ、アスモデウスの声に耳を傾けてはダメよ……）
心が揺れてしまう。ダメ、いけない……でも、マユが自分だけを見てくれる……。それは、アイラがずっと望んでいたことだった。
「あ、あぅ……あ、ぁ……」
アスモデウスの低く心地よい声が変貌し、聞き慣れた可愛らしい声になった。絡みついていた触手が消え、代わりに粘液まみれの白濁コスチュームを着た小柄な天使が現れる。可愛らしい瞳に意地悪でサディスティックな闇を湛え、マユはチロリと自分の唇を舐めた。
「アイラ、もう気づいているでしょ？　アイラがどうして聖白天使（イノセントエンジェル）の力を使えないか」
「あ、あぁぁ……。マ、マユぅ……！」
（騙されちゃダメ、こいつは偽物よ！　偽物のはずなのに……本物にしか見えない……！）
顔も声も肌触りも体温も、すべてマユそのものだ。そして、いつもアイラが心の奥底で思い描いていたような、ドロドロに穢された理想のコスチュームを身につけている。
狭い触手の体内で、マユの身体がアイラに密着した。ムンとした淫気がアイラを包む。

凄まじいニオイだ。アイラはそれを思い切り吸い込んだ。
（く、臭いぃっ！　なんてニオイなの⁉　それに、こんなに汚れて……）
アイラ以上に汚れたマユの姿に、アイラは昂奮せずにはいられない。マユは、アイラの顔に唇を近づけた。
「マユを穢す想像でオナニーするなんてひどいよ。アイラって、心が穢れてるんだね」
「う、うぅぅっ……。マ、マユ……」
マユの言葉が、アイラの心を抉った。マユがこんなこというはずがない。でも、わたしがしたことはそう思われても仕方がない——だって、自分でもそう思うんだもの。アイラはパクパクと口を動かす。責められているのに、イヤらしい気持ちがどんどん加速する。
（あぁぁっ、せ、責められるのが、こんなに気持ちいいなんて⁉）
「はぁっ、はぁっ……！　マ、マユ……ごめんなさい……許して……あ、あぁんっ！」
アイラの乳房がコスチューム越しに鷲づかみにされた。小さな手が脂肪にうずまり、揉みほぐす。
「ダメ、許さないんだから。えへへ、いっぱい虐めてあげるっ」
無邪気な笑顔を浮かべたマユは、小さな口を目一杯開けだらだらと涎を垂らした。やけに白濁した唾液がマユのグローブを濡らし、そしてアイラのボディスーツへ垂れる。
「ひぐっ⁉　あ、あはぁぁんっっ⁉　コスチュームが熱いっ。どうして⁉　マユの涎……あふぅっ、か、感じてしまうわ！」

ねちょねちょ、ぴちゃ、たぷたぷっ！　涎まみれのマユの手が、アイラの密着コスチュームに包まれた胸やお腹を軽く叩く。そのたびに涎が染み込んだ箇所が熱く灼かれ、まるでケガレを浴びたかのように快感が昇ってきてしまう。

「あれ？　マユの涎ぬられて感じちゃうの？　アイラって、エッチな変態さんなんだね」

「そ、そんなこと……」

否定しようにもしきれない、マユを想って背徳のオナニーをしていたという事実。言い淀んで視線を彷徨わせるアイラを愉しそうに眺めるマユは、豊満な自分の乳に涎をたっぷりとぬり込んだかと思うと、両手で胸を寄せアイラの目の前に差し出した。

「ふふっ、昂奮しちゃってるね。ほら、乳首同士こりこりしちゃうの。いいでしょ？」

マユは、揉みほぐされ涎をぬられ先端がビンビンに勃起していたアイラの乳房に自分のものを押しつけ、腰をグラインドさせ乳首同士をこね合わせた。

「あ、あぁっ！　乳首、乳首ぃっ！　マユの涎すごひっ、あ、あぁぁっ!!」

ガクガクガクッッ！　乳首から得も言われぬ快感が走り抜け、股間から熱いエキスが飛び出したのを感じた。軽い絶頂にアイラは脱力し、濡れた瞳でマユを見つめる。無意識の内に股間をマユになすりつけていると、マユは脚を曲げ股間に膝を当ててきた。

「あぁぁっ！　お、お股にマユの脚がぁ……」

（う、嬉しい……！　ずっとこうしたかったの!!　あぁっ、ずっと、このまま……！）

「アイラ、マユと一緒に、もっと気持ちよくなりたくない？」

耳元で囁かれる。アイラに拒否するという選択肢はなかった。ガクガクと頷き、アイラは惚けたように口を開け涎を垂らす。
「いい方法があるんだ～」
マユはアイラの股間を膝でグリグリとこねながら、小悪魔の笑みを浮かべた。
「はひぃッ！　マユぅっ!!　らめぇ、わらしのおまんこ、こねこねしゅるのらめへぇっ」
アイラは思い切り仰け反り、身体がバラバラになりそうなほど焦れったい悦楽から逃れようとする。しかし、狭い魔物の体内で密着しているせいでそれも叶わない。
「見て、アイラ……。マユのココ、こんな風になってるの……」
マユは、アイラの右腕を取ると、股間に当てていた膝をどけ、自分の太ももの間にアイラの手を誘導した。指先が硬いものに触れ、アイラは息を呑む。マユが邪な瞳で見つめてきた。その闇に、アイラは自分が吸い込まれていくような錯覚を覚えてしまう。
「こ、これ……マユ……まさかぁ……！」
「そうだよアイラ。マユのココ、おちんちん生えてるの」
密着コスチュームがずれ、ボロンと巨大な肉棒が転がり出た。小さな身体についたあまりにも逞しい男根に、アイラはヒクヒクと頬を震わせ身悶えする。その正体はただの触手なのだが、マユの幻に囚われてしまったアイラがそれを知る由もない。
（な、なんて大きなオチンポなの!?　やだ、マユにこんなのがついてるなんて……）
そんなはずがない、そんなはずがないのに、

「これで愛し合えるよ」
マユのペニスが、ツンツンとアイラの股間をつつく。
「はうぅぅぅっっ！　マ、マユと愛し合える……？」
マユの言葉が頭を巡る。変身した姿でベッドでマユと熱く絡み合う妄想が膨らむ。充満したケガレがその妄想、淫欲を増幅させる。
（あぁっ！　こ、昂奮してしまうわ!!　欲しい!!　チンポ欲しいのぉっ!!）
アイラの全身から汗が噴き出す。プシャッと秘部から牝汁が漏れ、ペニスを濡らした。期待に震える。どうしてマユにこれが生えているのか、そんなことはどうでもよかった。
「フフ、すごいでしょアイラ。欲しいでしょ？　イヤらしいクリちゃんこんなにして……我慢しなくていいんだよ？」
マユの指が、とんとんとアイラの秘部を叩いた。「はひぃっ！」と、嗚咽（おえつ）にも似た嬌声が迸る。クリトリスを人差し指の腹でクリュクリュされ、アイラは息も絶え絶えだった。
マユはアイラの頬をサワサワと撫で、欲情した瞳を覗き込む。間近で見るマユの、ぷるぷるで瑞々（みずみず）しい唇に視線が釘付けになった。
「――ねえ、この呪符外して？」
マユの言葉に、アイラはギュゥッと胸が締めつけられた。外したい。すぐにでも呪符を剥がして、マユのペニスが欲しい。だが、わずかに残った理性がそれを止める。
「そ、それは、ダメよ……。だって、ここ悪魔の中――」

「アイラ……。マユ、挿れたいな……？」
惑うアイラに、マユは上目遣いでおねだりしてきた。クリクリと可愛らしい瞳は媚びた発情牝の色を湛え、その破壊的な淫気にアイラの息が詰まる。
「アイラとエッチしたいの……ダメ……？」
「う、ぁ……！　ダ、ダメ……よ……!!　だって、わたしほんとに堕ちちゃう……!!」
「一緒に堕ちよ？」
間髪入れず返ってきた台詞に、ゾクゾクと全身がわなないた。追い詰められているのを感じる。胸に燃えさかる欲望がこみ上げ、いまにも喉から飛び出しそうだ。
「あ、あなたは、偽物でしょっ!!」アイラの声は震えていた。その言葉はマユにではなく、自分に言い聞かせるためのものだった。だが、もう――。
「堕ちれば、本物のマユも堕とせるよ？」
幻が、本物と変わらない可愛さと声でアイラに囁きかける。アイラの瞳が見開かれ、ダラダラと汗が垂れる。激しい呼吸に、何度も肩が上下していた。
（い、いわないで……もう、お願い……それ以上いわれたら、わたし……ッ）
ギリギリの瀬戸際、唇を噛みしめる。惑い、淫獄へ飛び込むことをためらう少女の背を、マユが優しく押した。
「堕ちなくちゃ、アイラの想いは届かないよ……」
くちゅ……。ふたなりペニスが、ぐしょ濡れの肉裂を、密着コスチューム越しに擦った。

そして、それがトドメだった。
（も、もうダメ！　欲しいわ!!　ケガレに呑まれたって構わない、マユのオチンポでわたしの膣内をかき回して欲しいのぉっっ!!）
アイラの瞳から理性が吹き飛んだ。視界に映っているのはマユの姿だけ――ここがどこかも、どんな状況かも、もうどうでもいい!!
「は、剥がすわ！　マユのお手々に剥がされちゃうのっ!!」
ベリッ！　ベリベリッッ!!　アイラの右手が、ハート型の呪符を一瞬で三枚とも剥ぎ取った。その瞬間、コスチュームがなんとか抑え込んでいたケガレが一気にアイラの全身を冒し、刺し貫くような悦楽がアイラを発狂させる。完全に発情するっ！
「あっひぃ――――――ッ！　イグッ！　イッちゃうぅッ!!　こんなすごいの初めてぇっ!!」
ぶっしゃあああぁぁぁぁっっ!!　いままでの背徳的なオナニーで得ていた快楽の記憶が吹き飛ぶ。ケガレグローブの快感が、数十、数百倍になったかのようだ。荒れ狂う波にもみくちゃにされ、アイラは一気にエクスタシーを極めた。
「アハハハ！　やっと剥がしてくれたんだね！　じゃあ、挿れるよ？」
「アァッ!!　マ、マユ、いまはダメぇっっ!!　イ、イッてるから！　わらしのアソコビクビクしてるからあぁぁっっ!!」
「だからいいんじゃない！　アイラの壊れた顔、マユに見せて」
マユの唇の端がニヤリと吊り上がった。ふたなりペニスが洪水状態の秘部に添えられ、

開いた陰唇をクチュクチュとかき回す。尿道口が陰核にキスをした。
「はひいいいぃ――――！　クリトリスしゅごいのぉぉっ！　処女マンコおかひくなっちゃう!!　マユ、だめえええぇっっ!!」
壊れる。乙女の大事なところ、守ってきた処女がなくなる。マユに捧げるのは構わない。むしろできるならそれを望んでいた。でも、いまは――いまされたら、死んでしまう！
「いただきま～すっ!!」
だが、マユは止まらない。触手のような剛直がアイラのお口に添えられ、狙い違わず処女膜を貫いた。
じゅぶうぅぅぅっ！　ズボ、ぶっちゅうぅぅっっっっ!!
「おっっっほぉぉぉッッ!!　イッックゥゥゥッ!!　オマンコイクッ、アクメしちゃうのほぉぉっっっ!!　オナニーとぜんぜん違うっ！　あひあああぁぁっ、へあああぁぁぁっっ!!」
イク。全身が雷に打たれる。痛みなどない。なにも考えられない。マユがいて、大好きな天使に処女を捧げた。ケガレが気持ちいい。マユ、マユ、マユ――!!
未開発の狭い肉襞がマユに押し広げられる。カリ首が襞をゴリゴリと削り、愛液をローションにして奥深くへと沈んでくる。気持ちよすぎる。膣が締まる。全身がわななく！
「あぁっ！　アイラの膣内(なか)いいよぉっっ！　痙攣して、狭くて、ぬるぬるしててぇっ!!　マ、マユすぐイッちゃうっ！　濃くてネバネバしたの射精(だ)したくなっちゃうぅっ!!」
「あへえぇぇぇ！　くひっ、んほぉぉぉっ!!　だ、射精(だ)ひてぇぇっっ!!　わらひらめなの

ほぉっっ！　も、もうずっとイッてて、オマンコバカになっちゃってるのよぉおっっ!!」
両手両脚が極限まで伸び、半分白目を剥く。恥ずかしすぎるアヘ顔を披露する聖白天使に、マユの肉棒はガチガチに硬くなった。
「イクッ！　マユもイクぅっっっ!!　アイラの膣内に、濃くて臭いザーメンいっぱい膣内射精してあげるぅぅっ!!」
ビクビクッ、どっぴゅるぅぅっっっ!!　ペニスが膨らみ、一気に爆発する。灼熱の白濁液がアイラの膣内を満たし、牝襞の一筋一筋にべっちゃりとへばりつき染み込んだ。
「んほぉぉおっ!!　イッグうううぅっっっ!!　マユのザーメン射精てるぅぅっ！　あひっ、あっひいいぃっ!!　ケ、ケガレをぬりぬりされちゃったみたいにあちゅいのぉぉおっ!!」
アイラはエビ反りになって、あまりの快楽に涙を流した。膣内が精液を浴びるたびにイッてしまう。悦楽に震える肉襞が精液にむしゃぶりつく。
「ずっと待ってたのぉぉッッ!!　マユがわたしにこうしてくれること、ずっと待ってたのよぉっっ!!　嬉しいッ、イクッ、らめらめらめえぇぇっっ」
アイラの膣が収縮し、ペニスからザー汁を搾り取る。汚らしい白濁汁が逆流し、結合部からドプッと外に飛び出す。
「ま、まだ射精てるぅっ!!　あ、頭がおかしくなっちゃうっ！　堕ちちゃうのぉっっ」
「すごいでしょ！　マユのケガレザーメン、たっぷり味わってね！」
マユの射精は数十秒経っても止まらない。小さい身体のどこにこんな量の精液が溜まっ

ていたのかと思うほどの白濁液が、膣内どころか子宮までもを犯す。女の子の最も大事なところから、ケガレが身体中を侵蝕する。コスチュームに行き渡る。手袋からブーツのつま先に至るまで染み込んでいく。

「ケ、ケガレザーメンっ⁉　あひぃいっっ‼　い、いいわ！　マユのだったら、ケガレでもなんでもイイのぉッッ‼　あ、あぁっっ！　オチンポがまた硬くぅ⁉」

射精を終え、一瞬ふにゃりと柔らかくなったペニスが、再び硬く勃起した。それどころか、一回目のときよりもさらに太く、雄々しくなっている。膣が広げられ、アイラのお腹が膨れあがった。

「アハハハ！　抜いてなんかあげないんだからっ！　アイラ、やっとケガレを受け入れてくれたね。マユ嬉しいです。ご褒美に、また特濃ザーメン注ぎ込んであげるっ」

「はへえぇぇ……ッ。ケ、ケガレを受け入れふ……？　うんっ、うん！　そうなのほぉっ！　ピュアハートアイラは、ケガレを受け入れるいけない天使なのぉっ‼　射精して！　イヤらしいお汁、膣内にいっぱいちょうだぁいっっ」

大好きなマユを前に、抑えていた感情欲望が爆発し、アイラはどこまでも堕ちていく。

守り続けた処女膜を破られた乙女の聖域は、人間とは比べものにならないほどの怒張で突かれた挙げ句、抜かずの連続射精により閉じることもままならない。自分の意志では肉棒を締めつけることもできず、ケガレの魔悦による反射だけで陰茎をしゃぶっている。

白濁液をたっぷりとぶっかけられたアヘ顔にかつての面影はなく、ケガレがもたらす淫

悦に、瞳は半分白目を剥いている。
アイラは幸せの絶頂にいた。マユが自分を犯してくれている。マユは自分を愛してくれている。だけど、本当のマユは淫獄の向こうで街の人も守ろうとしている。
――本当のマユ？
なにかがおかしい。破綻している。
理性は白濁した絶頂の波に呑まれた。
――これでいいのよ。
わたしの心は穢れている。マユでオナニーするわたしの心が、綺麗であるはずがない。
「あっっひいいいぃぃ――――！　ま、まだ射精しちゃうの⁉　オマンコ受け止められないのおおぉぉっっ‼」
喉がつぶれるほど叫び、アイラは快楽の海に沈んでいった。
＊
ぐちゅ、じゅぼじゅぼ……づぶ、どぷどぷどぷっっ‼
「あへぇぇ……。マユ、マユぅ……。愛してるぅ……。わたしだけを見てぇ……エッチなことといっぱいして、わたしにアへ顔見せてぇ……」
――悪魔の体内。
呑み込まれたピュアハートアイラが、触手に絡まれ笑っていた。
もうどれくらい時間が経っているのかわからない。淫楽と幻想の牢獄に囚われ、絶え間

ないオルガスムスに痙攣するアイラのコスチュームは崩壊しドロドロと溶け、わずかに手袋やブーツに面影が残っている程度だった。

膣には極太の触手がねじ込まれ、何度もケガレを射精している。触手が口に近づくと、アイラは嬉しそうに「マユ、ちゅ……」と、亀頭にキスし舌で舐め、射精された精液を飲み込んだ。両手は触手を扱き、ブーツを履いた脚は極太の触手をホールドしている。

剥がされた呪符は力を失い、肉襞に落ち溶けていく。

不意に、虚ろだった瞳に光が戻った。だが、それは以前とは違う輝きを放っていた。

白濁まみれのコスチュームが消え、黒いケガレが闇のコスチュームを形成していく。

「フフ、フフフ……。ねえ、マユ。ケガレって、すごく気持ちいいのよ……？　なんで気づかなかったのかしら。マユにも教えてあげなくちゃ……マユ、いま会いに行くわね……」

触手が離れる。唇に残った精液を、真っ赤な舌がぺろりと舐めた。

「ふぐぅぅ……ち、ちがうもんっ。マユ、マゾなんかじゃないんだから……あぁっ！　ち、ちがうんだからぁッ!!　これは、エッチな精液とケガレの……ひぃんっ!!　淫乱じゃにゃいのぉぉっ!!」

大好きなアイラに詰(なじ)られ、罵倒され、マユはさらに感じてしまう。凜としていた口調が崩れ、甘えるような、サドの心をくすぐるものに変わり始めている。

ぐじゅぶぶっ！　ビクビクビクッッ!!

マユの膣奥まで一気に突き進んだペニスが、そこで大きく痙攣した。アイラは喉元を晒し「くふぅぅっ！」と声をあげ、たまらないとばかりに左右にヒップを振る。

「ビクビクらめえぇぇっ!!」

マユは引き結んだ口の端から涎を垂らし、つま先立ちになり腰を浮かせてヨがり狂った。

「マ、マユ……なんて可愛いの!?　くぅっ、た、たまらないわ!!」

自分よりも小柄な天使の痴態に、アイラはゾクゾクと震えピストンを再開する。

パンパンパン！　と、激しく腰を打ち付けマユを責め、腰をうねらせ乳首をつまみ、声を漏らすまいと唇を噛むマユを堪能した。

「感じてるんでしょう!?　イヤらしい顔、この牝豚天使!!」

「ひぃぃぃっ！　か、感じてないもんっ！　あぁぁっ、ま、負けませんっ！　マユはぜったい……んんっ!?　あぁぁぁっ!!」

（ひ、ひどいよぉっ！　マユ、牝豚なんかじゃないのに、そんな……。うぅっ、い、いじ

められちゃってる、マユの弱いとこ……あぁぁっ！　感じちゃうぅっ!!）

アイラの膣責めは激しさを増し、何度も何度も子宮口へ亀頭を押しつける。

「あひぃぃっ！　おくっ！　マユのおくがぁっっ!!」

「マユ、Gスポットよりも感じる、女の弱点を教えてあげるわ!!」

「はぁぁんっ！　い、いいよぉっ！　そんなの教えなくて……ひゃうぅぅ」

アイラの放った言葉は、マユに淫獄へ引きずり込まれてしまいそうな恐怖を与えたが、同時に胸が期待にときめき、甘美でエロティックな刺激に膣がキュッと窄んでしまう。

「この刺激には耐えられないわよ！　堕ちなさいマユぅっ!!」

アイラが腰を引き、素早く突き上げる。アイラの頬を流れた汗が顎から滴り、マユの胸元へ落ちた。

ズンッ、ズンズンズンッ!!

「アァッ!?　へ、ぁ……な、なひこれ……ひ、ぎ……きゃひぃぃぃぃぃんっっ!!」

ガクガクガクッ!!　マユの身体が痙攣する。腹部が激しく波打ち、肉感的な太ももに食い込んだニーハイブーツが、一本の棒になったかのようにピンと伸ばされた。

アイラのペニスは、過たずマユの子宮頸部、ポルチオを打ち抜き、初心な聖白天使（イノセントエンジェル）を快楽の濁流に呑み込んだ。ケガレによってポルチオは開発の必要もなく性感帯として開花している。淫楽の底なし沼に沈み込んだマユは、口を開け瞳を見開き、身体を仰け反らせ快感に叫んだ。

「どう⁉　キクでしょう！　ここを突かれたら、女の子はみんなおかしくなっちゃうんだから‼　ケガレに冒された身体ならなおさらね！」
「ひいぃぃっ！　ア、アイラやめへっ！　らめ、これらめっ‼　こんらの、がまんれきなひっ‼　イクッ、マユイッちゃうぅっ！　脚ぴんってなって、らめなの、アァァッ‼」
（こ、こんなの初めてッ！　ま、まだこんなすごいのがあったのぉっ⁉　ダメ、が、我慢できるわけないよぉっっ‼）
「アハハハ！　オマンコが締まったわね！　ビクビクして、イきそうなんでしょ⁉　ポルチオの味はどう⁉　イッてもイッても終わらない、アクメ地獄を味わいなさい‼」
「ひぎゅうっっ⁉　ぽ、ぽるちお……あぁぁっ‼　ぜ、ぜったい、イかないんだからぁっ！　マユは負けないよぉっ‼　はひ、はひぃっ！」
ガクガクッ、ビクッ、ガクガクガクッ‼　マユの身体が何度も跳ね上がり、絶頂して当然の快感が全身を貫く。膣が収縮し、アイラのペニスを絞る。
――負けない、負けたくない！　マユは、マユはぁッ‼
心の中で自分を鼓舞しつつ、口からは快楽の悲鳴を放つ。全身が硬直し、乳首からダラダラとミルクが流れ出る。
「せ、聖気がぁっ！　ピュアハートの聖気が抜けちゃうっ⁉　らめっ、イクッ、アァッ、が、がまん……イかない、イかないのぉっ‼」
晒されたニップルの先、精液がたっぷりつまった手袋とブーツ、愛液、汗、涎、立ち上

る湯気、むわっとする臭気。それらすべてに混ざり、聖白天使（イノセントエンジェル）のエナジーである聖気がマユの身体から抜けていく。ただでさえケガレを相手に消耗し、コスチュームが脱げてしまうまで弱まった聖気、それがさらに弱化してしまう。

――こ、このままじゃ、マユ聖白天使（イノセントエンジェル）じゃなくなっちゃうっ！　ほんとに牝豚敗北ヒロインになっちゃうよぉっ!!　お、おまんこすごいのっ！　ぽるちおセックスしゅごいのぉっ!!

口には出せない、恥ずかしい言葉が頭の中を飛び回る。「牝豚敗北ヒロイン」という、イヤらしく背徳的な響きがマゾヒスティックな快感を生み出す。

「すごいわねマユ！　さすが正義のヒロイン様は違うわ!!　でも、もう限界なんでしょ？　そんなに意地張っても、ムダ……よッ!!」

ズンッ、じゅぶっ、ズボズボッ!!　アイラの腰が、浮き上がったマユの媚肉に打ち付けられパァンッ、パァンッッ!!　と音を立てる。汗の飛沫が、二人の美女の身体をてらてらと妖しくエロティックに彩る。

アイラの責めは容赦なく、そしてねちっこく、優しい。巧みな腰使いでペニスを操り、極大の亀頭でポルチオを正確に刺激してくる。

アイラの言う通り、マユはもう限界だった。

――あへぇぇっ！　らめっ、おまんこダメ、奥ダメ！　我慢するの、ピュアハートなの！　マユは、マユは負けないんだからあぁぁっ!!

「あひぃっ、あひっ、あひっ！　イ、イク！　そんな、いっぱいがまんしてるのに、アァッ！　か、身体が勝手にイッちゃうっ!!　そんな、ダメだよ、あぁっ！　負けちゃダメなのに!!　イ、イックううぅぅぅッッ!!」

ガクッ、ビクッ！　ビクビクビクンッッッ!!　マユのヒップがさらに浮き上がり、ピンと伸ばされたブーツがカタカタと震える。いままでと明らかに違う痙攣に、アイラはマユの絶頂を感じ、股間に力を込めた。

「イクゥッ!!　マユイッちゃうううぅぅぅっ!!　見ないで、アイラ見ないでえぇぇっ」

――ピュアハートなのにイクッ！　正義のヒロイン負けちゃうのおぉぉっ!!　おちんぽしゅごいっ、イグッ、イグよおおぉぉっ!!

「く、あぁぁっ！　マ、マユのオマンコ、き、きつ……！　締まって、し、搾られるわ!!　くぅぅっ！　あぁぁっっ!!」

マユとアイラは仰け反り、オルガスムスの波に身を委ねた。ペニスがムクムクと膨らみ、亀頭の先からピュルルッと微量の精液が零れ出す。

「んひぃぃぃぃッ！　ケ、ケガレきちゃうぅっっ!!　だ、大事なところにお精子……あぁっ！　キ、キクッ！　狂っちゃうぅぅっ!!」

ほんの数滴の精液だけで、マユは歯を食いしばり浅ましいイキ顔を見せ、ビクンビクンと跳ね回った。さらに発情が加速してしまう――！

「フフ、フフフフ！　わたしのペニスから放たれる精液は、そこらのケガレとは桁違いな

の。まだよ……まだ溜めるんだから……一気にマユの膣内を満たしてあげるんだから……ま、まだまだいくわよ！」

「ま、まだ続ける気なの⁉　マ、マユまだイキ終わってな……くっひぃぃ――――ッ」

絶頂の海から顔を出し、アヘアヘと恥ずかしすぎる喘ぎ声を出すマユは、アイラの言葉に目を見開き、許しを請うような目でアイラを見た。だが、サディスティックな少女は構わず腰を振り、ポルチオに精液をこびりつかせた亀頭を押しつける。

「んほおぉぉぉぉっ！　イグッ、またイグぅぅっ‼」

「あはあぁぁっ！　マ、マユのアクメマンコすごいわぁっ‼　膣痙攣で、オチンチンぶるんぶるんって……アァッ、イクイクッ！　わたしもイクわ‼」

アイラは絶頂すると同時、再び股間の筋肉に力を入れ、昇ってくるケガレ白濁液の流出を止めてみせた。肉棒が膨張し、さらに雄々しく硬くなる。

「ヒィィィッ！　ガ、ガチガチだよぉっ！　アイラのそれ、硬くておっきくて……マユの恥ずかしいお口壊れちゃうぅぅっ」

「まだ恥ずかしがってるの！　オチンポとマンコでしょ⁉　はっきりいわないと、もっと突いてやるんだからぁっ‼」

「あへえぇぇぇっ！　やら、らめえぇぇっ！」

睾丸がない代わり、淫棒自体に精液を溜め込んだアイラの淫獄ペニスはマユの初心な秘部を押し広げ、ゴリゴリと襞を削るように刺激し開発していく。

――アァッ！　ダメ、おちんぽなんて、そんなエッチなこと叫んじゃったら、もう戻れなくなっちゃうっ！　おまんこ、おちんぽ……す、すごくイヤらしいのぉっ！
いけない想いが爆発してしまいそうだ。正義のため、みんなを守るため、そしてなにより、愛しい親友を救うために頑張ってきたマユ。しかし、この快楽は――。
――く、口が動いちゃうっ！　ダメ、叫んじゃうっ!!
「おまんこいいよぉっ！　トロトロアクメおまんこ、アイラのガチガチおちんぽでハメハメされて感じちゃうのぉっ！　あひぃいっ！　またイクうぅぅぅっっ!!」
「つ、ついにいったわね！　聖白天使（イノセントエンジェル）のくせにっ!!」
「ひきゅうぅっ！　ち、ちがうのぉっ!!　これ、口が勝手にぃっ！　マユは感じてなんかないもんっ！　ぜったい、こんなおちんぽに負けたりしないんだからぁっ！　ひぐぅっ」
「肉襞ぐじゅぐじゅいわせて、チンコ締めつけてるくせによくいうわね!!　アァッ！　マ、マユのアクメマンコすごすぎるっ！　膣がうねって……これ、い、淫魔のチンポなのに、アァッ！　お精子が漏れてしまいそうよ!!」
ビクビクと、アイラの剛直は何度もマユの膣（なか）内で跳ね、絶頂を思わせる痙攣を起こしているにもかかわらず、先端からぴゅるっと少量の精液を漏らすだけで、代わりに大量のカウパーを放っていた。
「ひぐぅぅぅ……！　らめらよぉっ！　す、すこひ射精（だ）されただけですごいのに、いっぱいらされたりゃあぁっ！　マユおかひくなるぅっ!!」

またマユの膣内に白濁液が漏れ、マユはアクメ顔を晒しヨがり狂う。

淫魔の肉棒はマユの愛液に絡まれ、さらにうねる膣壁に絞られ、責められる。カリ首にぬぷりと襞が密着したかと思うと、ざらっとした感触に亀頭全体が包み込まれる。その状態でポルチオを突くと、膣全体が収縮し、たまらない快感がアイラに押し寄せた。

「フ、フフ、アハハハッ！　そろそろ、わたしもいっぱいいっぱいね……!!　たっぷり精液も溜まったし、これを全部ぶちまけたら、マユどうなっちゃうかしら!?」

「んひぃぃっ！　イクゥッ!!　射精しゃないでぇっ！　あうっ、あううっ！」

「いいえ、射精すわよ！　マユの小さいマンコに、たっぷり射精して種付けしてやるんだから!!　負けないんでしょ!?　こんなチンポに、聖白天使が負けるわけないわよね!?」

恐ろしい膣内射精宣言にイキ叫ぶマユに、アイラの非情な言葉が突き刺さる。――正義のヒロインが負けるわけない――その台詞を、マユが否定することなどできるはずもない。しかし聖気はさらに弱まり、活性化する淫魔のケガレがマユの快楽神経に接触し、淫らな触手が心を冒していく。抵抗しなければという正義の心と、気持ちよくなりたいという背徳の心が混ざり、混乱を極めるマユを幻惑し、最悪な台詞を叫ばせてしまった。

「あへぇぇぇっ！　マ、マユは負けないもんっ！　そうだよぉっ、お、おちんぽなんかに負けないんだからぁッ!!　射精されたって……あぁっ！　膣内射精はやっぱりらめっ！　赤ちゃんできちゃうっ、妊娠しちゃうからぁぁっっっ!!」

「も、もう遅いわ！　くっ、が、我慢できないッ!!　聞いたわよ、マユがいったんだから

……膣内射精しなさいって、マユが……アァッ！　わたしのマユが、そんなこと……んひいいいっ！　射精るッッ!!　チンポミルク射精るわ!!　マユに膣内射精キメちゃうううっっっ!!」

ズグンッ！　アイラの腰が浮き上がったマユの身体に叩きつけられる。Gスポットを抉りポルチオを突き刺し、ブクブクと真っ黒に膨らんだペニスがいままさに爆発しようとしていた。

「ひ、あッ！　か、あ、あ、あぁぁッッ!!」

――く、くるっ！　膣内射精きちゃうっ!!　マユのオマンコにケガレきちゃうううぅうううっ!!

ドブッッッ!!　ブッピュウルルウウウウウッッ!!

「あひいいいいっっ！　ケガレ精液膣内射精いいいっっ!!」

「おほおおぉぉぉぉっっ！　溜まったザーメン射精るッ射精りゅうううぅうっっ!!」

結合部から白濁液が溢れる。二人の少女が半分白目を剥く。蕩けた顔がアクメに染まり、ガクガクと腰が動く。牝の悲鳴が迸り、天使と堕天使は乱れ狂った。

「あヘッ、アへえぇぇっ!!　マユのお腹膨らんじゃうぅっ!!　んふっ、はへえぇっ、ちんぽ汁濃いのぉッ!!　あぁぁぁっ！　お口ぱくぱくしちゃうっ！　おまんこぱくぱくしちゃってるよぉっっ!!」

「んぐ、ひあぁぁぁんっ！　すごいわぁっ!!　溜まった精子全部射精すのイイッ!!　なん

て気持ちよさなの⁉　た、たまらないわ！　マユの小さなマンコに全部射精（だ）すのよぉっ！」
絶頂が理性のたがを外し、アイラのみならずマユまでも卑猥な言葉を叫んでしまう。オルガスムスの淫悦が美少女二人を押しつぶし、意識を混濁させる。
マユの、あのクリクリと愛らしい、守ってあげたくなる瞳は見る影もなく淫に溺れ、口の端では精液をブクブクと泡立たせている。純白コスチュームに以前の輝きはなく、精液と汗に汚れ近寄りがたい悪臭を漂わせる。大人びたブーツが淫肉ベッドを叩き、縛られたグローブに拘束具が食い込む。ムチムチの太ももは波打ち、ヒップが艶めかしく踊った。
――も、もうダメ……い、意識が……あぁぁ……⁉
「あへえぇぇっ！　ギンギンおちんぽすごいのぉっ！　マユ、なにもされてないのにイッちゃう！　精液すごすぎてイグのほぉおぉおっ！　んほぉおっ、あへっ、あへえぇぇ」
あの、どこまでも健気に人々を救おうと奮闘していた聖白天使（イノセントエンジェル）の口から、信じがたい台詞が次々と飛び出してくる。マユの本心、決して折れない正義の心はケガレによって胸の奥底に押しやられ、浅ましい牝の欲望が口を開いていた。
「フフ。どう、マユ……堕ちようよ……？」
白目を剥き、無様なアヘ顔を晒す正義の変身ヒロインの耳元で、アイラがそっと囁く。
「ひぎぃっ⁉」
ズボォッ！　とペニスが引き抜かれ、溜まった精液がじょばばぁっと流れ出す。だが、すでに時は遅く、十分すぎるほどのケガレがマユの体内を侵蝕し、天使の聖気を穢してい

る。流れ出したのは、ケガレを含まぬただの白濁液だった。
「へあぁ……はへ、はへえぇぇぇ……」
マユはとてもしゃべることなどできず、浅く速い呼吸を繰り返している。虚ろな目にわずかな光が灯り、首が小さく横に振られた。
「……そう……わかったわ。じゃあ、もっとひどい目に遭わせてあげないとね」
微かに動いたマユの顔と目の動きからなにを読み取ったのか、アイラはため息をつくようにそう告げると、まだ精液をぴゅるっと噴くペニスを縮め、コスチュームを元に戻した。
堕天使は無言で立ち上がると、ゲートを喚び出す。マユの拘束を外し、聖白天使（イノセントエンジェル）の密着コスチュームを乱暴に元に戻した。
「マユ。こんなこと、わたしはしたくないのよ？　でも、あなたが堕ちないっていうなら、現実を見るがいいわ」
「う、ぁ……あへ、ぁ……」
独り言のように呟かれたアイラの言葉に、マユはわずかに反応する。そんな小さなヒロインを抱えると、アイラは再びサディスティックな笑みを浮かべた。正義の天使を堕とすためなら、どんな手段も厭わない狂気に、淫獄の空気すらも震える。
マユは、アイラに抱えられたまま、闇が渦巻くゲートをくぐった。

「ち、ちがいますっ！　あぁぁ、これはちがうもん……マユ、こんなことしたくないのに……いや……身体がおかしくて……いうこと聞いちゃうのぉ……」
マユの、どこか言い訳めいた否定の言葉はやがて尻すぼみになり、欲望に燃える男たちを見上げていた視線は地面に落ちた。
「フフ、もう自覚してるんでしょマユ……。あなたの心に、イヤらしい牝豚の情欲が巣くっていることに。たまらないわよね、こうしてみんなに見られながらハイハイするの。嬉しいんでしょ？　マンコがひくついてるわよ!!」
みんなに聞こえるように、悪堕ちした天使は叫ぶ。人々の視線が突き刺さり、マユは羞恥に総身を震わせた。
「ちがう……ちがうもん……マユ、昂奮なんてしてないんだから……ひうっ、み、みんなにだって、ちゃんといえばわかってもらえるんだから……」
マユは涙目でアイラに言い返しながら、人々の間を這い続ける。
ぐじゅるる……じゅぶっ、べちゃべちゃっ。グローブやブーツの履き口から精液が漏れ地面に染みを作る。股間からも、愛液と、アイラの精液が混じった汁が零れていた。
「おい見ろよ」「汚いし、臭すぎるわ」「コスチュームもなんか黄ばんでるぜ。あれだけ派手にヤってれば当然だよな」
軽蔑の眼差しが、痛いはずなのに被虐の悦びを生み出してしまう。マユは鼻を啜り、涎を一筋流しながら、睫を揺らしキュッと唇を結んだ。

（いや……恥ずかしい……。き、黄ばんでるなんていわないでぇ……！　だ、だって仕方ないもん。ずっと精液に浸けられて、変身しっぱなしで……マユの汚くて臭いコスチューム、そんな目で見ちゃいやぁ……）

聖白天使（イノセントエンジェル）の象徴ともいえる、眩いばかりの純白コスチュームは、精液に浸けられ、小水を漏らし、汗や涎、様々な汚れが付着して元の色を失い、黄ばんで薄汚くなってしまっていた。めくられたスカートから見える、密着コスチュームが食い込んだお尻と秘部。ぷりぷりのそこに視線が集中しているのを感じると、マユは視悦を抑え込むために可愛らしい喘ぎ声を漏らして止まらなければならなかった。

「はぁん……ん、ぁっ……い、いやぁ……」

（お、お尻とアソコ、そんなにじろじろ見ないでぇ。そこ、おしっこもしちゃってて……あぁっ、い、一番黄ばんじゃってるの……！　ピュアハートなのに、正義のヒロインなのに、イヤらしく汚れて……うぅ、マユの黄ばんだお股見ないでよぉ）

見ないで欲しい。そう思えば思うほど、〝見て欲しい〟という欲望が膨らんでいく。「んっ、んっ」と、マユのヒップがさらに高く突き上げられ、飢えた獣と化した男たちを挑発する。

「んだよコイツ！　物欲しそうな目しやがって!!」「なんとかいえよ、おいッ!!」

膨れあがった性欲が爆発し、男たちの無遠慮な手がマユに伸びる。そして、薄汚く黄ばんだ白濁コスチュームをまさぐった。

「んひぃぃぃっ！　ひぐっ、あへあぁぁっ!!」
（さ、触られただけで声が出ちゃうっ！　マユの身体どうなって……あぁっ！　コスチュームそんなに弄らないでえぇっ!!）
淫汁にまみれた聖衣は、男たちから発せられるケガレと共鳴し、ムチムチした身体をさらに激しく感じさせる。どこを触られても異常な悦楽を覚えてしまう。
「ひあぁぁっ！　コ、コスチュームはダメなんですっ。いやぁっ！　お尻触られちゃうと……あぁっ！　あきゃあぁぁっ!!」
「なんだこいつ、触られただけでイキそうじゃねえか！」
「ハッ！　なにが聖白天使（イノセントエンジェル）だよ、お前なんかただの淫乱天使だ」
目を血走らせ、理性を失った男たちが口汚く罵る。
「ひ、ひどい……そんなこといわないでください……マユは、ひぃんっ！　お尻はダメぇっ！　ス、スカートめくれて……いやぁぁ……」
膝立ちになったマユはお尻を触る手から逃れようと腰を振っていたが、それがさらに飢えた獣を引き寄せる結果になる。
邪な視線から大事なところやヒップを隠してくれるはずのミニスカートは、度重なる陵辱のよってめくれ、精液によって皺がくっついて常に股間をさらけだす、少女の敗北感を煽るだけの代物に成り下がっていた。
ぷりんとしたお尻を、荒い息を吐いた男の、ごつごつとした手がイヤらしく這い回る。

汗と精液に蒸れ、ねとねととテカるヒップにザラッとした指先がひっかかり、こそばゆいのが気持ちいい。

「フフ、愉しそうね。わたしも混ぜてよ。精液ちょうだぁい」

マユの背後から声が聞こえ、数人の男たちが歓声をあげそちらに向かった。

「うわ、くっさいチンポね！　だらしないんだから。わたしが舐めて、綺麗にしてあげる」

マユがチラリと視線を向ける。アイラはM字開脚で、突きつけられた肉棒を扱き、根元まで咥えた激しいフェラチオを披露していた。

「はむっ、じゅるるっ、れろれろれろっ！　んっんっんっんっ!!　ぷはぁっ。そうだ。マユにどれだけぶっかけて膣内射精してもいいけど、暴力は許さないわよ。マユはわたしのものになるんだから、殴ったりしたら殺すわ」

発情した気怠げな瞳で人々を睨めつけ、アイラはぺろりと真っ赤な舌を出して笑う。ビリビリと大気が震え、微かな、しかし圧倒的な魔の波動が伝わってきた。

だが、それを聞いた彼らは、うろたえるどころかより一層昂奮し、マユの若く小さな肢体にむしゃぶりついてきた。

「んひぃぃっ！　み、みんな、どうしてぇっ!?　アァッ！　お、おっぱいチュッチュってしちゃだめっ！　ひっ、そんなもの見せないでぇっ!!」

群がる野獣たちはもう、マユの言葉に耳を貸さない。そこにあるのは淫虐と悦楽を求める欲望のみ。アイラの放った波動がケガレの力を解き放つ。服が解け、股間の肉棒を屹立

させた男たちが、マユの顔に穢らわしいものを押しつけてきた。
「あぁんっ！　い、いいわっ!!　もっとオマンコ弄りなさい！　激しく、そうよッ……跪きなさい。わたしのマン汁、たっぷり飲ませてあげる!!」
いつの間にか立ち上がっていたアイラはもう、自分の秘部をさらけだしていた。男の無遠慮な指が膨れあがった陰唇をかき回し、クリトリスをこね、暖かな膣内へと進んでいく。恍惚の表情を浮かべた淫魔天使は、命令通りに座った男の顔に股間を押しつけ、ねっとりと熱い愛液をぶちまける。見れば、アイラの傍らにはすでに、数人の男たちがペニスから精液を漏らし倒れていた。
（ア、アイラ……もうあんなに……うぅ、み、見ちゃダメ……イ、イヤらしすぎるぅ）
「よそ見してるんじゃねぇ、とっとと扱け！」
「こいつ胸触るとビクビクしやがるぜ」
「あひっ！　や、やだぁっ！　み、みなさん、お願い、落ち着いて……はうぅっ、お、おっぱいは……あぁぁんっっ!!」
アイラに向いていた顔を無理矢理引き戻され、両手にペニスを握らされる。ケガレにコスチュームを冒され、力を発揮できないマユは、彼らにされるがまま小さい手で肉棒を握り、胸をぐにぐにと揉まれ浅ましい声をあげる。
（こ、これ……すごく熱くて……ビクビクしてぇ……。イヤ、こんなのヤダよぉ……!!太すぎて、つかみきれないぃ……。うぅっ、ピュアハートの手袋は、おちんちんをコスコ

スするものじゃないのに……。く、悔しいよぉ……）

「くぅぅっ！　し、舌が激しすぎる……ッ、で、射精ちまいそうだッ」

「じゅるるっ！　レロレロッ！　フフ、らしちゃいなさいっ！　んぶっ、んぶぶぶぅぅっ」

アイラの声がマユの耳に入り込み、全身に染み渡って熱を発する。

エロティックなサキュバスは男の精を搾り取り、うっとりと微笑んでいた。妖しい仕草に魅了されギンギンに硬くなった肉棒を、アイラの黒手袋が扱く。フェティッシュなすべすべの黒手袋によって行われる手コキは、長い指を蠢かせ亀頭を摩り、カリ首、裏スジを責める、予測のできない波状攻撃だ。男たちはあっという間に射精してしまう。

「射精して、ぶっかけてっ！　あひぃっ、ケ、ケガレが溜まってるわ!!　濃すぎて……あ、くっ……か、かけられただけでイクぅっ!!」

ドピュルゥウゥッッッ!!　四方八方から白濁液をかけられ、アイラはたまらず昇天した。

「あはぁぁ……た、立っていられないわ……！　さぁ、アイラをもっと虐めてぇ……」

艶めかしい動きで股間を強調し、漆黒のコケティッシュなブーツを誘うように揺らし、淫楽の魔姫は男たちの視線を開ききったヴァギナへ釘付けにする。

「やめてください……マ、マユできないよ……。こんなおっきいの扱くの……いや……く、臭いのぉ……」

一方、男たちのペニスを握りしめ、奉仕することを拒絶するマユは、しかしチラチラとアイラとその取り巻きへ視線を走らせていた。目元がほんのりとピンクに染まり、吐息は

甘く熱い。グローブ越しに感じる肉棒は、時折ビクンビクンと脈打ち、マユを怯えさせる。
「そ、そんなもの向けないでぇっ！　やだ、あぁっ！　エ、エッチなことしないで……い、いまはダメなんです……お願いぃ」
　マユを囲んだ人々の股間にそそり立つ剛直は、どれもいまにも射精しそうなほど激しく脈打っていた。黒く、雄々しく、アイラにはなかった牡のニオイが充満する。カウパーからケガレの気配が伝わってくる。
　男たちは色めき立ち、マユの舌足らずで可愛らしい声を聞くたびに肩を跳ね上げ、両手で肉棒を押さえ込んだ。おそらく、淫魔のエナジーが作用しているのであろう。彼らの男根はどれも、人間離れした大きさと太さ、硬さを誇っていた。
（み、見ちゃダメぇっ！　そんな、いやぁ……おちんちんから、に、逃げられないぃっ！）
「あぁっ！　な、なにをしているんですか⁉　いやっ、し、扱いてるところなんて見せないでえぇっ」
「ハ、ハハ！　バカなこというんじゃねえよ。そんな目で見られて、昂奮しないわけねえだろうが！」「小柄なナリして媚びやがって！　そんなにこいつが欲しいか！」
「ち、ちがいますっ！　あぁ、ほんとにちがうの……これは、これはぁ……」
　マユの心は未だ快楽に抗おうと、彼らを救おうと、聖白天使（イノセントエンジェル）の清らかなものを持ち続けている。だがすでに、表面に現れる牝の本能と、身体から発せられるオーラはピュアハートのものではなくなっていた。

マユの瞳に浮かんだ被虐の悦びと、総身から沸き立つ嗜虐を煽る敗北天使のオーラ。保護欲をかき立てる可愛らしい顔は、一転して性の悦びに染まった瞬間、淫魔は当然として人間さえも虜にし、虐めたいという暴力的な欲求をいたずらに煽るものになっていたのだ。そしてさらに、天使が白濁に染まる過程を見せつけられていた男たちの昂奮はもう爆発寸前、ピークに達していた。

「あはぁぁ……ひぅ、ふぅ、ふぅ……んっ……ぁっ……」

桜色の唇から漏れ出す吐息は、アイラの大人の色香を醸し出す艶めかしいものとは違って初々しく、サディストの心を妖しく揺さぶる。また、縮こまった腕の間に挟まれ、怯えたように小刻みに震える巨乳は、ピンクのツインテール、小柄な背丈というあどけなさと相まって強烈なギャップを生み出し、意識せずとも男たちを誘惑している。

元はすべすべだった光沢手袋は、ペニスを握り精液に揉まれ黄ばんでベトッとしていたが、極太肉棒をやっとつかめる小さな手の魅力を損なうどころか、むしろさらにイヤらしく魅せている。脚を包むニーハイブーツは、つま先を動かすたびに〝にじゅる、じゅるる〟と音を立て、密閉されて逃げられない脚が中でどうなっているのかと、フェティッシュな妄想をかき立てずにはいられない淫衣と化していた。

シュッシュッと、男たちは各々のイチモツを扱き始める。

「はは、たまんねえなあ。エロい身体してやがる」

「一度、天使様にぶっかけてみたいと思ってたんだ。たっぷりオカズにさせてもらうぜ」

「そ、そんなっ……。みなさん、あぁ……か、かけないでください、やめて……。マ、マユ、ピュアハートはダメなんです、コスチューム汚されちゃうと、か、感じてしまって……だから、お願い……！」

「そんなこといわれたら、かけるしかねえよなぁっ!!」

ペニスが脈打つたびに、男たちの瞳から生気が抜けていく。虚ろな目をした彼らから、ぞわぞわとケガレが立ち上った。

筋肉が盛り上がり、脂肪がそげ落ちる。男たちの腰が反射的に前後に動き、汗が飛ぶ。

「フハハハハ!!　さあ、射精すぞ!!」

「ふにゅうっ！　だ、だめっ！　ダメだよぉっ!!　いや、射精されちゃう……マユぶっかけられ……あ、あ……！」

マユはなんとか逃げようとするが、取り囲む人垣を抜けることはまず不可能だ。羽はすでにボロボロで飛ぶこともできない。

大きさを増していく肉棒が震え、射精の予感と期待に胸が詰まる。

(だ、射精され……!!　また発情きちゃううううっっ!!)

ドピュッ！　ビチャビチャブチュルルゥゥゥッッ!!

「んひいいいいいいいッ！　ぶっかけらめへえぇぇぇぇッッ!!」

コスチュームに精液がぶっかけられ、マユの小さな肢体は白濁のシャワーの中に消えた。

精液の量は、数人がかりとはいえとても人間が射精せる量ではない。淫魔のエナジーが

彼らに変調を起こしている。巨大化したペニスから数リットルあるのではないかというような白濁汁を噴き出し、欲望の塊が天使を撃ち溺れさせる。
「んほへぇぇ……！　こ、濃いよぉ……らめえぇ、こんなのマユ耐えられないぃ」
射精が終わっても男たちの肉棒は萎えることを知らなかった。そして、彼らの足下に溜まった白濁の塊がガクガクと動き、精液まみれになったマユの声が聞こえる。
どろっとした牡汁が頬を流れ落ちる。膝立ちの太ももがブルブル震え、全身をコーティングされてしまった聖白天使（ノイセントエンジェル）は腕を上げようとするが、にちゃべちょと粘つく精液が邪魔をして、腕を上げることができない。
男たちはニヤニヤと笑いながら、そんな美少女ヒロインに腕を伸ばしてきた。
「ひゃあぁぁうぅっっ！　うぅうぅあえぇぇ……せ、精液ぬり込まないれえぇ」
身体中をまさぐられ、ぶっかけられた精液をコスチュームにぬり込むような動きに、マユはたまらず悶えた。もはやピュアハートの聖なるコスチュームは、汚されるたびに少女の開発された肢体を発情させる性感帯に成り下がっている。
「ケガレがぁ……はあぁあっ！　やめへ……ぬりぬりされちゃうとマユ、マユぅっ」
「ハハ！　こんなので感じるのかよ！」「おい見ろよ、こいつの服、めちゃくちゃ伸びるぜ」
マユの媚体をまさぐっていた男の手が、黄ばんだコスチュームをつかんで引っ張る。伸縮自在な聖白天使（ノイセントエンジェル）のコスチュームはゴムのように伸び、手を離すとビチュッ！　と汁気ばんだ音を立て「きゃうぅっ」とマユに悲鳴をあげさせた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
催眠
応募すれば絶対貰える!
催眠ソフトプレゼント!!
偶数月
17日発売
vol.72 2013 10
990 yen
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミック UNREAL アンリアル
08 2013 AUGUST
1980yen
Hisasi
気持ちいい天罰♡
受けてみる?
奇数月
12日発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
Vol.13
chaccu
TS魔法少女が母と共に戦う!
マヴカレ魔法少女!
chaccu
原作:コトキケイ
今号でラスト&
今秋リニューアル!
奇数月
下旬発売
詳しくは本誌の中身をチェックしてね!
コミック OMIC UNREAL アンリアル
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。